

## イギリスの国民性(3)

武井邦夫

### ディベリウス『英国』("ENGLAND")

ディベリウス(Wilhelm Dibelius, 1876~1931)は英語・英文学者として、ハンブルグ大学、ボン大学、ベルリン大学の教授をつとめた。本書は1922年に初版が出たが、その後、改訂版が何回か出た。邦訳は昭和18年、前川・川村両氏の訳で、『英国』という題名で日新書院より出版された。これは原著の改訂第5版(1929)の英訳を底本にしている。

第1篇「国土および人民」、第2篇「政体」、第3篇「宗教および教会」、第4篇「教育」、「結語」より成っているが、この内、第1篇第6章「国民的特性」を中心に紹介しよう。

彼によれば「英国国民性の本質的特徴は、低サクソニー地方とフリーズランドの農民の本質的特徴に外ならない」。全ゆる国の農民と同じく「やや実利的な傾向の人間で、金銭と食卓の逸楽を好み、想像力に乏しく、保守的で、精力的で、頑固である」。スカンチナヴィア海賊の血が混ったために、他の諸国民以上に、「強烈な意志力」と「むき出しの利己心と斗争意欲」とが強められ、農民的な「こまやかで愛情深い、直感的な性質」を窒息させようとしている。「同様にこの型の人間に固有の深い宗教心が、己れの過ちを認めることができず、何時も自分を信仰の亀鑑と思ひこみ、自分と異なる人間をすべて尊大ぶった自信ある態度で見下す、農民固有の昂然たる傲岸さと不断に相克している点は故国と同じである」。これがディベリウスの総論である。

英国人は個人主義者である。このことは彼らの伝記好みによく示されている。「伝記によって偉人とある種の個人的関係を確立できるからである」。彼らは、「人物を描いた物語」を好む。それは「おだまりの性格と冒険の物語」である。絵画も「肖像画と逸話」を画かなければ認められない。選挙も政策より人物本位である。戦争時には敵を悪魔のような敵対人物——ナポレオン、ウィルヘルム二世のような——に擬人化する。

しかし、彼らは伝統の範囲内でのみ個人主義者であるにすぎない。これは教育をみれば判る。イギリスの学校は指導者型の人間を創る教育で、「不羈の言動をする個人の養成を目ざしているのではない」。イギリスでは規格外れの天才は世に容れられないか、またはそうなるのに時間がかかる。ブレイク、シェリ、バイロン、スウィンバーン、ワイルド、ショーのような個性的天才は誰一人として国民的熱強さでむかえられなかった。

英国人は「わかり易いもの、散文的なもの、実際的かつ有用なもの」を好む。言葉も実用的かつ簡潔で、「語尾変化は殆んど全く消失し、文法は単純化され、綴りは理解に必要な最少限度まで縮められている。言葉は殆んど何の飾りもないが、それでいて可能な最小限度の努力で、あらゆる事物を驚くほど明瞭に、正確に言い現わすことができる」。

英国人は理屈というものを生れつき信用しない。大学教育は大陸より知的に遙に劣っている。また心理的操作を明快に假借なく遂行して論理的帰結に達することをきらう。法律は慣習法で範令主義で、慣行・先例がものをいう。哲学は形而上学的でなく、実際のな心

理学、倫理学、政治学、経済学にすぐれている。功利性の哲学者、フランシス・ハッチンソン、チェレミー・ベンサム、J・S・ミル、H・スペンサー、それにアメリカのW・ジェイムスなどは皆この流れをくむ哲学者である。

英国人の保守性は歴史の上にはっきり現われている。「英国は過去から甚だしく飛びはなれたような進路にのりだしたことは曾てない」。ヨーロッパのいかなる国も英国のように着実に文化の進展を示していない」。文学、建築、風習、貨幣制度、度量衡、などには全て古い要素が残っている。

しかし、彼らは硬直的な保守ではない。古い制度が乱脈化すれば、かならず、しかも徹底的に改革される。しかし、その場合でも、古い形式は一般に保存され、新しい用途に向けられる。ランカスター公領尚書、御璽尚書は全くの冗官だが、大物政治家を無任所大臣として遇するのみに用いられる。ロンドン市長選もそうである。Old Englandはもはや殆んど存在理由がないように思われているが、「その実、衰えを見せぬ活動力でこれまで幾度も幾度も世界を驚倒させた」。

イギリスはドイツと違って、風土、職業的差異からくる性格の違いは少なく、わずかにイングランドとスコットランドの差異が目立つだけである。ドイツの諸階級は融合しないが、イギリスでは上の階級への同化がさかんである。イギリス人の共通の理想は紳士である。これは中世の騎士道の伝統——忠誠・名誉心・婦人に対する尊敬、服装、举止の上品さ——を受けつぐもので、中流階級向けに修正されている。武技修練はスポーツ愛好に、王者崇拜は政治的領袖や組合運動指導者への忠誠に、名誉心は名誉毀損行為に対する重刑に姿を変えた。また英米両国ほど婦人を大事にする国はない。しかし、英国の農民や労働者の家庭では「他国と変りなく婦人は牛馬のように使役されている。」衣・食・住、旅行、召使いの誇示は明らかにナイトの伝統を引くもので、スコットランド人にはない風習である。彼らはまた自分の属する階級の風習に忠実に従う。

ギリシャ、ローマの古典に対する愛好心が英国より強い国は他にない。また「実際の方面における著名の成功と、科学者として高度の活動を兼ね備えた人物」が多いのもイギリス特有である。

紳士の規範は階級内的かつ国内的にのみ効力を有していた。アイルランド政策や奴隷貿易には適用されなかった。ようやく19世紀になって、それは外国人にも適用された。「英国をして大陸のあらゆる土地からの政治的亡命者の避難所たらしめたものは、いろんな如才のない政治的動機もそれに混じているものの、正にこの種の感情、国民の最下層部にまで滲透しているこの種の感情なのである。しかし、この感情はアングロ・サクソン民族の最有力な本能、すなわち権力欲と争うような事があれば、実に弱い」。ポーア戦争時の捕虜収容所の惨状や、世界大戦時、嘘を故意かつ組織的に利用したことがそれを物語っている。

紳士の観念は倫理的なものからは遠く、「一般人の心理では未だに、ある程度の資産と由緒ある家柄との親族関係」と結びつけられている。ドイツでは騎士の理想は陸軍将校と学生とに受けつがれているが、中流階級の多数はこれを排し、その理想である簡易生活が上流人士にも浸透している。しかし、イギリスでは清教徒的中流階級道徳は上流階級道徳に座をゆずってしまった。紳士は階級の理想で、人類的規範ではない。紳士よりも高遠な規範は他に幾らでもある。「近代の諸国民中、その倫理感を唯一つの倫理感に限ることを許

したのは英国だけである」。「この型は型として達しうる最高限にまで発達している」。「この思想を実践に移すために、およそ道徳の掟の支持に利用しうる限りの社会的圧力を利用するばかりである。これによって、英国騎士が全世界にわたって生み出したような莫大な成果が上ったのである」。

「普通の英国人の心中では紳士としての感情と、彼らの気質に固有の熱情とが不断に抗争している。熱情は、外国人の観察者が、紳士の冷かな落ち着いたものごしの裏におよそ認めそうもないものであるが、しかしこれは英国人の性格の基本的特徴の一つである。一般休日の大衆を観察するがよい。下層階級ないし英国の軍人の旅行者が自国をはなれた時に、どういう風に自制をなくするか注意するがよい。社会的強制力が一時的に撤去されたような機会に蘇ってくる烈しい愛情と憎悪の恐るべき力に注意するがよい」。「この北欧海賊的な熱情の痕跡は、英国文学のいづこにも容易に読取れる。三文小説やシネマの俗受けする主人公は冷静な沉着きみせる紳士ではなくて、根はあくまで親切で、ニコニコしていて、冗談好きだが、本当に怒ったとなるとすぐさま啖呵を切り、拳を振廻すといった強い男である。……熱情的な意志のルネッサンス人が只1個の国民、それも英国民の文学において、シェイクスピアや彼の当時の人々に依って表された様な完全な表現を得たということは決して偶然ではない。長期にわたる広汎な紳士教育の過程を経来った今日においてすら、激し易い男が、昔のままの狂戦士の兇暴さを具えて、エミリー・ブロンテの『嵐ヶ丘』に、トマス・ハーディの『カースター・ブリッジの市長』の中に突然に出現するのである」。

「英国人の権勢欲はこの熱情の恐るべき力を現わしている。この権勢欲が彼をして世界の征服者たらしめ、未知の地域や極地の発見者たらしめ、発明家、技術者たらしめたのである。……典型的な英国人は唯一種類の気晴ししか知らない。それはスポーツである。……彼は、二人あるいは二つの組の間で、どちらが強い、上手であるかをはっきりさせる力競べとしてのスポーツだけを愛好する。……歴史の上ではアングロ・サクソン民族は粗暴で冷酷残忍な征服者として現れる。彼らの国王の物語はゲルマン系に属する多くの民族の国王よりも、野心に駆られた暴行と、奸智を弄する殺人と、骨肉相争う戦争に富んでいる」。ヘンリー八世以後、この傾向は「海による抑制と鍛錬を受け始める。海において英国人は、豪胆さと忍耐さと威力とを再び学びとったのである」。

「サクソニー農民のいろんな柔和な特徴も彼の子孫の中に残存している」。「彼はあらゆる非合理的なものに、折にふれて軽蔑の冷笑を浴せるかもしれないが、心の底では非常に深い尊敬を抱いている。これは英国人の強い宗教的本能の中に再び姿を現わす」。

「この非合理的本能を考慮しなければ、英国生活は理解できない。……これあればこそアングロ・サクソン民族は物質的快樂を追い、権力欲を追求しながらも、それに溺れないのであり、また非合理的な諸価値に対してこれほどの尊敬を払わない社会であったならば、社会秩序の完全な崩壊を来す程のデモクラティックな形態をとりながらも、なおかつ共同生活を組織することができるのである」。

それは文学的には感傷性となって現われる。また公共生活では、社会立法、牢獄および養育院改革と、動物愛護と禁酒運動の面で現れる。イギリスはそれらの発祥地である。

「アングロ・サクソンは、またその新しい故郷にサクソニー農民の自由の熱愛をたずさえ来った。英国史上のあらゆる大事件はこの感情を強化し、それをして英国史自体の決定

的要因と化せしめるに貢献した。……英国人は、自由の観念の発達は文明に対する彼ら独特の貢献であるという風に考えている」。

「英国人の自由は、実際には、国家の個人に及ぼす権力が制限を受けるという点にある」。

「ふつうの英国人は国家を単に伝統的な秩序と考えるだけで、それに対してなんらの尊敬も抱いていない。彼はデモクラシーをこめたあらゆる政治に対し、牢固として抜くべからざる不信の念を抱いている」。

「英国文明の原動力を構成するものは、正しく、厳格な型と徹底した個人の自由との結びきの点にある。今までのところ、近代欧州諸國中、英国だけが一種の世界支配と、その支配圏内での明確なタイプの文明の創造という二重の事業を成就した。ローマ帝国以来、世界はこういう結合が他に起ったためしをしらない。衣服にも英国風があり、男女いずれも英国風の頭髮の刈り方、分け方があり、英国風の住宅があり、英国風の食事の時間、英国風の食卓作法、御馳走がある。スポーツには特に英国風の娯楽がある。18・9世紀には哲学の英国学派が発展した。英国教会はアングロ・サクソン民族の間にのみみられる形態の宗教である。独特の教育方法、理想を持ったイートン、ラグビー、オックス・ブリッジは、全く国民的な産物である。のみならず、こういう型の文明は世界到る所に見出される」。

「世界大戦時に、ドイツは世界に対して、おれは只自分を護ろうとするだけだと公言した。この言葉に世界の人々は魅力を感じなかった。世界の人々はドイツの生きんがための苦闘を、わびしい、いらだった気持で見守っただけだった。英国は、自分はあらゆるものに平和と自由をもたらすのだという宣言をたずさえて世界の半ばを征服しようとするだけだった。そして世界の人々はその言葉を信じた。世界は自由と平和を欲し、無限の福祉のために無限の犠牲を払うに慣れているが故に」。

以上が第1篇第6章の要約であるが、英文学を中心とする英国学に深くかつ広く通じたドイツ人学者らしい鋭い観察が至る所に見られる。英国人の英国論にはどうしてもナルシズム的な甘さが件うが、彼の場合にはそれがないだけに逆に英国国民およびその文明の特長が鋭くとらえられている。本書が外国人による英国論の白眉だと称せられるのも決してほめすぎではない。

次に、第2篇「政体」で、興味深い点をいくつかみてみよう。彼によれば議会政治はイギリスの国民性に根ざしたもので、それ以外の国では失敗する。

「議会政治は絶対に理想的な政治制度ではなくて、英国国民が己れの心理的条件に適合する様に構成した制度にすぎない。それがうまくゆくのは、英国では2つの条件、すなわち、総理大臣の至上権と、二大政党主義が充たされているからである。議会政治が真に卓越した人物を国家の最上位に就かせているのは、議会政治が彼に無制限に似た権力を与えようと申出るからである。……議会が指導者にこういう半独裁的権力を与えない国、権力が指導者の手中になくして、政党のめまぐるしい離合集散の間に処して相争う立身出世主義者達の掌中にあるような国では、本当に偉大な人物は議会に魅力を感じない。こういう場合には、政権は博大高遠の思想を持つ経綸家の手に帰さないで、小策を弄して妥協を図り、国家を犠牲にして悪煽動家連の卑しい野心を満足させるような策士の手に帰する。議

会は王者崇拜本能の強烈な国民の間において始めて存在しうる。従ってアングロ・サクソン系の諸国家で成功し、ラテン系の諸国家では殆んど成功しない。それは国民が服従の能力に欠けた強烈な個性の人間で成立している国では存在しえないものであり、一定の、根本的には劃一的な型の範囲内においてのみ個性の發揮を許すアングロ・サクソン文明の宿命的な産物である。

次に、議会政治は二大政党制度と興廢を共にする。それは各政党がいつでも国務を担う用意のある時にはじめて機能を發揮しうる。すなはち、反対党が自分は共同で經營している会社の弟分の社員のようなものであると思っている場合がある。国民は同一型の人間で成立つていかねばならぬ。それは民族を国家よりも重しとするような異民族分子を含んではならぬ。それは宗教上で分裂してはならぬ。烈しい宗教的斗争の雰囲気の中に生活している人間にはよく生活の中心が二つ——国民的な中心と宗教的なそれと——になる傾向がある。そして殆んど必ず教會的党派が政治的党派と並んで起り、それと交叉するであろう。長い間、英国議会政治はその内部に肌の合わぬアイルランド分子が存在したために重大な危険にさらされた。さらに、そういう国民は、国民的、政治的関心が他のいかなる関心よりも強烈であるような人々から成立つていかねばならぬ。すなわち、権力斗争に熱中する余り、国家の政治に参与しようという願望のためには、あらゆる宗教的、社会的その他の差異はさしおいて顧みないような人々から成立つていかねばならぬ。アングロ・サクソン民族はそういう国民であり、そしてそういう国民は彼らだけである。……議会政治がうまく行っている国は、英国を除いて、欧州中に一つもない。……議会政治は本当に正しい有能な行政よりも強力な指導者の方を遙に好むアングロ・サクソン精神の自然的産物である。議会政治は、自然的組織どころか、アングロ・サクソンの変態現象にすぎない。それはアングロ・サクソンの土地では偉大な成果をあげるかもしれぬが、外の土地で盲目的に模倣すれば害毒を流すばかりである」。

ディベリウスによれば、「文明に対する英国の寄与はこの自由国家にある」。「英国々家は常識と、敵対者の特権階級仲間への同化吸収という、2個の特に英国的な假定の上に築かれている。英国々家は自由を特徴とする。何人たりとも、法律にして己れの良心に逆らう場合はそれに従う必要がない。これ程までに極端な自由が許されているのは、国民全体が本質的に類似しており、国家を分裂させるような宗教その他の大斗争がなく、またあらゆる重大問題については、大多数の英国人が全く隣人通りに行動することを好み、宗教問題にせよ、ネクタイの流行問題にせよ、上流階級の与える指導に忠実に従うがためである」。

このような民主主義論からすれば、日本人は一見非常に民主主義の發達の素質を持っている国民のように思えるが、日本では余り政治家に優秀な人材が進出して行かない傾向がある。首相の権限は強大だが、オピニオン・リーダー型の政治家よりも和型の政治家の方がより尊重される傾向があるところをみれば、イギリスの国民性と日本の国民性の類似は表面的にしかすぎない。牧畜型農民と水田耕作型農民とのちがいかもしれない。

## マルティン・ウィーナー：「イギリス文化と工業的精神の衰退 1850～1980」

次に、いよいよイギリス病の文化人類学的考察に入ろう。まず手始めに、Martin J. Wiener: "English Culture and The Decline of the Industrial Spirit", 1850～1980(1981年, ケンブリッジ大学出版部刊)をみてみよう。ウィーナーはライス(Rice)大学の歴史学の教授で、ハーヴァード大学で学位をとり、本書の他、"Between Two Worlds: The Political Thought of Graham Wallas" (1971)がある。

本書は、「第一部 背景(The Setting), 第二部 世界観(A World View), 第三部 行動へ(Toward behavior), 第四部 工業主義とイギリスの価値(Industrialism and English Values)」より成るが、ここでは序論に当る第一部の第一章を訳出する。但し、一部省略した部分もある。文中、Britishを英国的、Englishをイギリス的と訳したが、著者自身使い分けられているとは思われない。

### 第一部 背 景

#### 1. 現代イギリス文化のヤヌスの顔

##### 文化的価値と経済的遅れ

英国現代史の主要な問題は経済的衰退の説明である。1960年代までは過去一世紀の英国史のために一般的に受け入れられてきた枠組みは一連の成功物語だった。：民主主義の非流血的確立、福祉国家の進化、二つの世界大戦における勝利、帝国の開明的な放棄、がそれである。そのような幸福な枠組みはだんだんと主張するのが難しくなってきた。なぜなら英国人は政治的騒動や軍事的敗北の暗礁をうまく避けた後で、自分達が経済的サラゴサ海の中で身動きできなくなっているのを見出したからである。歴代の労働党と保守党の政府が、自分の経済を隣国や競争相手国並みの水準に高めるためにとった種々の万能薬が徒らに焦立たしい失敗に終わったのを見るにつけて(北海のガスと油という予期せざるタナボタにもかかわらず)、この問題は長い歴史を持っているという実感が深まった。コレリ・バーネット(Correlli Barnett)は、1975年に次のように論じた。「イギリス病はここ10年や20年の新奇なものではなく、一世紀以上前からの現象である」。この問題の扱い難くさは、それが国民の社会構造と精神的風土とに深く根ざしていることをますます明らかにした。英国の20世紀の経済的衰退が検証されればされるほど、社会的かつ心理的要素が経済的要因とからまり合っていることがだんだんと判ってきたのである。LSE(ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス)のドイツ人学長ラルフ・ダーレンドルフは数年間英国を研究した後、次のように結論した。「経済的成果と文化的価値とは結合している」、また「英国のための有効な経済的戦略は多分文化面で始まることになる」と。

英国の経済的衰退に対して全ゆる歴史的説明方法がいままでに提唱されてきた。それらは純粹に経済的なものから始まって政治的、社会的、かつ心理的構成要因に及び、またマルキストからケインズィアンにいたる思想的スペクトルに始まって自由市場の見地へと及んでいる。それは明らかに複雑な問題であり、そして単純なまたは通説的解決を欠いている。E. J. ホブスボームがきびしく要求したように「経済的現象に関しては経済的説明が利用可能な限り優占するべきである」ことは当然のことだが、従来提唱されてきた説

明は、その不適當さによって、この問題の性格をますます明らかにしただけである。厳格に経済的な説明は問題のある仮定に基づいているか、または「残余の」要因——それは社会的かつ心理的なものであることが明らかとなる——に広いスペースを残してきた。

世界的なパースペクティブでいえば、文化と経済をきびしく分断することは難しく、かつ役に立たないように見える。発展に関する経済学者たちはくりかえし純粹経済分析の限界に直面してきた。主導的な大部分の発展理論家は経済的動機づけは必要だが、それだけではある社会の進路の向きを直すには不十分だということに同意してきた。文化、社会そしてイデオロギーは発展過程にとって中心的なものであるといわれてきた。この意識は大量の著述を生んできた。それは特に社会心理学者と発展に関する専門家から発出したものである。彼らは現代化された社会の成員によって与えられた社会心理学的変化のモデルを仕上げるのである。これらの研究は全て、性格や世界観や価値観や社会の経済的転形における態度のように量的区別が難しい要因の重要性を明らかにした。このアプローチは社会心理学者またはアメリカの学者に限られてこなかった。スウェーデンのノーベル賞学者グンナー・ミュルダール (Gunnar Myrdal) は、部厚い著書「Asian Drama」の中で、発展に含まれている——そして明らかにそれにとって必要な——社会的、文化的な大変動を詳細に示した。インドの例は経済的發展に狭くアプローチしている者を全く圧倒する。インドの独立以来の経験は国内の経済計画家や西洋からの顧問を焦立たせてきた。くりかえしいえば、財政的・金融的政策の企画、対外援助、そして工業的・農業的投資計画は多分世界でもっとも保守的な文化に内蔵された触知しがたい抵抗にあって失敗したのである。

もう一つのアジアの社会、日本はその対照的な成功によって、経済的ビヘイビアは文化的真空の中では起らないという事実を強調した。我々は日本の驚くべき急速な発展は、特にその経済的技術に関していえば少くとも日本の社会と文化の特異性——例えば、労働関係の「部族」的性格と注目すべき適応を可能ならしめる内部訓練——に、多くを背っていることを見てきた。何人も日本文化の作用原理の把握なしに日本の経済的奇跡を完全に理解できない。

特にイギリス文化的要素は経済生活にどのように影響を及ぼしたのか？、労働組合の「反対主義 (Obstructionism)」に与えられた全ゆるる宣伝にもかかわらず、この質問は大衆的なイギリス文化よりも「ブルジョワ」又は「エリート」に第一義的に関連する最終的分析の中に存在する（両者の正確な区別線は存在しないとはいえ）。エリートは世論の有効的風調と物事のやり方の双方に不相応なほどの影響を及ぼしてきた。指導層の価値観は、特に現代の英国のように安定的かつ結合力のある社会では、社会全体に浸透し、国民的価値感と一般的精神力 (mentalité) の色彩をまとう傾向がある。経済的な面では、すでにみたように、ボスは彼らにふさわしい労働者を得る傾向がある。労働者の態度と行動は、反動的にもせよ、雇い主の態度と行動によって深く影響される。それでは、イギリスの中流と上流階級の文化はその国民の経済的發展にどのように影響を及ぼしてきたのだろうか？

### 進歩と不満

長い間イギリス人は「進歩」という言葉に快適さを感じてこなかった。ある社会分析家が認めたように、「進歩」はイギリスでは奇妙にもあいまいな情緒的力を持つようになった。「それは我々が受け入れ、正式に承認さへするが、私的には懐疑的な傾向を意味して

いる」。産業革命を生み、それを世界中に輸出した国民がその成功の計測に困惑しているのは一つの歴史的皮肉である。イギリス国民はその正統性を否定するために実質的に工業化を排除しているイギリス国民性の概念を採用することによって、浪費的な子孫に対して不安をすら感ずるようになった。

英国では物質的かつ技術的發展に関するこの疑惑と、工業化主義についてのこの象徴的排除とは、密接に関連していた。それらは産業革命の進行中に現われたが、新社会の確立につれて色あせる代りに生き残り、拡がり、強化された。ヴィクトリア時代後期には、それらは複合体を形成するようになり、「教養ある世論」を包みこんだ文化的症候群を形づくったのであった。出現しつつあった物質的成長と技術革新の理想化は阻止され、安定、静けさ、過去との近さ、「共物質主義」という反対の理想によってますます押し戻された。「イギリス的生活様式」は定義づけられ、広く受け入れられた。それは非工業的の非革新と非物質的特質を強調した。それはさびついたイメージ——スタンリー・ポールドウィンの「イングランドは田舎である」（彼の時代にすでに愛用句であった）という句にもっともよく表現されていた。イギリスの神髄は（外見にもかわらず）経済的又は技術的ではなく、社会的かつ精神的である。それは発明や生産や販売の中に存在するのではなく、保存、調和、そして道徳化の中にあると宣言した。イギリスの国民性は本来進歩的ではなく、保守的であった。その最大の課題——と成果——は、それが無思慮にも解き放った危険な進歩というエンジンをかいならし、「文明化」することにあつた。

長い間、この外観はしばしばプライドの源泉として宣言された工業的現実と競合した。結果として生じた社会的諸価値の衝突——ノスタルジアに対する進歩、道徳的安定性に対する物質的成長——は、二つの広く拡った、かつ対照的な工場と庭園（又はShire）という文化的シンボルの中に表現された。イングランドは「世界の工場」（the Workshop of the World）たるべきか、それとも「緑したたりかつ楽しい土地」（Green and Pleasant Land）であるべきか？ この質問はその当然なことと思われる工業的価値観と田園的価値観との非両立性と共に、偉大な多くのイギリス人の心の背後に横たわっていた。

田園的神秘は工業化にじやまされてはならなかった。19世紀後半と20世紀初頭のアメリカでは、ノスタルジアはより単純かつ幸福な時代としばしば見なされたものに対して豊かに存在していた。田園生活はしばしば理想化され、国民に対するその道徳的重要性について多くのことが語られた。しかし、これらの感情は共にイングランドにおけるように、進歩自体又は経済的發展についての批判にまではめったにならなかった。もっとも若干の知識人は例外であった。彼らの断呼たる殆んど無政府的な個人主義的口調は文化的主流の外に居るといふ自意識を反映していた。田園賛美者でさえ、又初期アメリカに対する郷愁家もめったに製造業や通商をけいべつしなかった。アメリカの自作農の理想は技術的又は商業的改善を発明または採用しようと常に心がけている農業的技術者、資本家および市場生産に従事する実務家のそれであった。ジェファーソンのような人は「田園の共和国」を理想化しながら商工業の發展を文明の本質的部分として歓迎したのである。工業は来るであろうし、来らねばならなかった。ヘンリー・フォードと1820年の彼のグリーンフィールド村の再建によって明らかにされたように、ノスタルジアでさえ、アメリカでは現代的性格を持っていた。このプロジェクトはフォードの幼い頃のより単純なアメリカの感傷的喚起であり、同時に技術的進歩の祝福でもあった。アメリカ人は彼らの「庭園」を理想化したか



もしれないが、それはわれわれがこれから見るようにイギリス人のヴィジョンとは正反対であり、経済的にダイナミックで、技術的に進歩的な庭園であったのである。

イングランドでは、機械と庭園とのシンボル——工場とShire——はもっと直接的な対立関係にあった。これらのシンボルは少くとも過去一世紀間以上の間、中流と上流階級の文化に深く植えつけられるようになった緊張を体現していた。この期間におけるイギリスの国内史の特異性の多くは、それ自体戦いつつある一国民、または少くとも一つのエリート<sup>1</sup>の産物であった。

現代イギリス文化の内部におけるこの緊張は一種のパズルである。工業的前進への敵意は世界最初の工業社会で何故に存続し、強められさえしたのか？ このような敵意は何故にしばしば田園神話を形成するという形態をとったのだろうか？ 若干の答えが19世紀英国社会史の特異なパターンの中に横たわっている。

### 決して存在しなかった革命

19世紀の英国は近代化の先駆者であった。しかし、近代化へ向って英国がとった道はせいぜいのところ一つの道にすぎなかった。英国の推移は尊敬に値するほど平和的な漸新主義によってマークされていたが、同様にそれ故にこそある種の不完全性によってもマークされていた。この不完全性から永続的な文化的結果が生れてきた。

近代化は決して単純かつ容易な過程ではない。それが起る場合には時と場所を問わず、きびしい心理的かつ思想的なひずみが生じた。とはいえ、それらはドイツで見出したような劇的形態をとらなかったし、またそのように多くの注目を集めなかった。英国ではこれらの緊張は特に見逃され易かった。というのは近代化への推移は比較的スムーズで、なんらの政治的大騒動も内包しなかったからである。しかし、この非常な温和性は英国の発展の中に自己制限的な要素をはびこらした。他の諸国における産業革命は少くとも外部から生じ、そして伝統的な社会的パターンに挑戦し、かつそれを分裂させた。他方において、英国では工業化は土着的であり、それ故根元的に変化する必要のなかった現存の社会構造によりたやすく適応した。

しばしばもてはやされるヴィクトリア時代の成果は、この光を当ててみると、ヤヌスの顔的であった。もしも社会が最少限の暴力で転形されるなら、転形の程度は外見よりもより多く制限された。新しい経済諸力は社会構造を引きさかなかった。古い価値観と行動パターンとは新しいものの内で生存し続け、かくして新しいものの性格は非常に深く修正されたのである。19世紀の英国の転形の最終結果は実際一つの平和的な適応であったが、前近代的要素を新社会の内部に刻みこんだ適応であり、そして反近代感情に正統性を与えた。その文化的かつ実際的結果は20世紀になって漸く明確になったのである。

ヴィクトリア時代の成果の両意性は左右両翼の若干の観察者によって認められてきた。保守党の政治家、サー・キース・ジョゼフ (Sir Keith Joseph) は英国の現代の経済的問題を「英国が資本家的支配階級または安全的な『高ブルジョワ (haute bourgeoisie)』を持たなかったという事実の中に位置づけた。結果として、と彼は論じた。「資本家的またはブルジョワ的価値観は他の若干の諸国におけるように思想と制度を形成しなかった」。この解釈はある重要な真理を表現しているが、不公平かつ誤解を与える形態においてである。それは資本主義とブルジョワジーとをぼやかす。現代英国史の特異性に対する鍵はこ

の両者が異なっていることである。英国民は世界最初の（多分オランダを除けば）本質的資本家的支配階級を持った。18世紀は貴族とジェントリーを登場させた。英国が決して持たなかったものは文字通りのブルジョワまたは工業的エリートであった。この決定的区別は二人のマルキスト歴史家ノペリー・アンダーソンとトム・ネールン（Tom Nairn）によって有用に仕上げられた。アンダーソンとネールンは英国における産業革命は地主的支配階級である貴族がまだもっと豊かになり、より自信を持つようになり、そしてより緊密に編成された寡頭制になりつつある時に生じたという事実の重要性を強調した。しかしながら、この貴族制度はもはや封建的なものではなく、本質的には資本家であった。アンダーソンはこう論じた、「こうして最初から古い貴族制と新しいブルジョワジーの間には封建的な敵対的矛盾が存在しなかった」。結果としてブルジョワ革命は生じなかった。その代りに適応が在った。しかし、この両階級は資本家であるとしても、同一な仕方ではなかった。貴族の資本主義は、個人的違いはあるが、基本的にはランチェエ(rentier)であり、企業家的または生産的ではなかった。こうして貴族とブルジョワジー間の適応は新中流階級による相対的に孤立かつ受動的な経済的役割への適応を意味した。ランチェエ的貴族は文化的ヘゲモニーを大規模に維持しつづけ、そして結果として（後述するように）工業的ブルジョワを自分のイメージに合わせて再形成しつづけた。ヴィクトリア時代の貴族の後退は心理的なものであるよりは政治的なものであった。地主的エリートは除々にのみ工業家に道をゆずった。その結果、ウォーソン（Peregrine Worsthorne）が最近いったように、「権力の移転は一世紀以上長引き、征服というよりは合同に、強姦というよりは結婚（多くの場合文字通りに）に似ていた」。その結果はウォーソンの言葉によると「ブルジョワジーの文明化」であった。

貴族的ヘゲモニーは同様に——実際、より明白に——英国の新手のライヴァルであるドイツでも存続した。何故なら二つの国民の政治史は余りにも劇的に対照的だったので、長い間英国はドイツのそれとは正反対の道——ドイツが「封建制度」をとり続けているのに対し、完全なブルジョワの勝利の道をとっていると誤解された。英国は典型的な「商人国民（nation of shopkeepers）」であると思われた。——一つのナポレオンの嘲笑、それは最初に発せられた時偽りだったが、ドイツ人の作家によって世界大戦の前の最中にくりかえされた時にも、より明白でないにせよ、まだ偽りであった。本当のところ、英国とドイツは共に強く弾力性に富んだ貴族的社会の真最中に強力な産業革命を経験したのであった。

この工業と貴族との遭遇が二つの国で異なった経済的(政治的なことは述べない)成果に導いたということは多くの要因によって説明されうるが、その中主要なものは経済的変化の年代記であり、貴族の風穴の大きさであり、そして多分もっとも決定的なものは各々の貴族制度の性格である。なぜなら、ドイツの産業革命は英国のそれよりも後に、そしてより突然生じたので、ドイツの工業的ブルジョワジーはより古いエリートによって受け入れられ、かつ吸収されるのに要する時間がより少なかった。第二に、プロシヤの貴族制度は富裕な実業家を、彼らがいかにユンカーをモデルに再形成すべく急であろうとも全くおかまいなしに、自分たちの隊伍に受け入れる用意がイギリスの貴族制度よりも足りなかった。これら二つの理由で、ドイツ帝国の新工業家と経営者は彼らよりも昔に確立されたイギリスの競争相手以上に自分達の専心の対象を生産に求めつづけたように見える。

しかしながら、この点をこえて、二つ貴族制度は彼らの尊敬すべき中流階級に全く違っ

た方法で影響を及ぼした点で異なっていた。プロシャの貴族制度はまだ侵略的で権威主義的なカストであったが、イギリスの貴族とジェントリーは繁栄したので、ずっと昔にそういう性格を洗い落としていた。さらに、ユンカーは彼らのカスト的誇りにもかかわらず、イギリス的尺度では富んでおらず、彼らの経済的・政治的地位を守り、かつ発展させるために無情の斗争を続けねばならなかった。彼らのロマンチックな気取りにもかかわらず、フリッツ・シュテルン (Fritz Stern) が観察したように、ユンカーはますます農業的工業家 (agrarian industrialist) になった。ビスマルクの政府に経済発展の地政学的価値を評価させ、また工業が政治的支持と引きかえに関税的保護 (そして、究局的には世界政策 [Weltpolitik]) という経済的支援を手に入れた歴史的協定 (1878~9年) の底に横たわっていたものは、多分軍国主義と経済圧力とのこの結合であった。特に 1879年 以後はドイツの工業ブルジョワジーは、「自由貿易」または政治的自由主義に対してイギリス人よりも非好意的であるが、経済成長 (国力に密接に関連する) への熱烈な推進力 (drive) を維持するにはよりふさわしい一つの貴族的モデルの方向へと動いて行きつつあった。ドイツでは、こうして、資本主義と自由主義とは工業化主義よりもずっと低く評価されたのに対し、イギリスでは、その発展が禁止されたのは工業化主義であって、資本主義または自由主義ではなかった。このようにして、近代化と堅固な貴族主義との結合は、ドイツでは妨害の多い政治的發展に導き、英国では抑圧的な経済發展に導いた。

適応の英国的形態は得失 (gain and cost) を伴った。得は政治的かつ社会的安全性であり、初期工業化主義の野性の「人間化 (humanization)」であった。失は、ネールン (Nairn) がいうように、「資本主義の貴族的ヘゲモニー内への封じこめであり、それはその当時もそれ以後も、工業化主義の侵略的發展または社会の、後者の価値観と関心への一般的転換に有利に働かなかった。永続的な社会的かつ心理的制限はかくして英国における産業革命の上に加えられた。コルレリ・バーネットが現代英国の軍事的指導権史に関する彼の著作で述べたように「工業社会の社会的かつ知的価値は貴族的なそれを決して追及しなかった」。この成功に充ちた貴族的——紳士保持行動から明らかにイギリス的な「封じこめ文化」が發展した。社会的紛争は決して解決しなかったが、出現した妥協の内に内面化された：古い貴族制度の刻印を持つ新しい支配的なブルジョワ文化。この妥協的な文化内部の緊張は物質的進歩に関する思想をとりまく懸念や不満の中に、また庭園としてのイングランドの文化的シンボルの上に積みこまれた情緒の中に反映された。これに止まらず、これらの緊張はブルジョワ文化を形成しただけでなく、文化を通して行動を形成した。都市的な工業社会の人間化に役立ってきた現代英国の変化に満ちた慣習——ニュー・タウンとグリーン・ベルト、園芸愛、大部分の現代建築にすらみられる用心深さ——は、この社会的妥協に負うところ大である。より好ましからざる行動パターンは同様にその印を示している——これらの中の主要なものはしつこい経済的停滞である。

「紳士化」されたブルジョワ文化の強化、特に中流上層階級における擬似な貴族的態度と価値観の定着は世論を教育し、経済的努力に対する不利な状況を形成した。経済史家、経済学者、公務員、そして政治的指導者さへも経済的成長を刺激するというよりは抑制するのに役立った感情と理想を抱いた。しばしばこれらの成長の追求さえもが同時に彼らの文化的環境の影響を示した。それは、そのような成長の「包みこみ」又は「飼育」を示した。工業家自身は彼らの世界観とそこにおける彼らの役割を發展させるさいに決定的に影

響をうけた。彼らはまた貴族的な価値観と生活様式としてみたものに引きよせられ、その結果しばしば経済的効率性を損ずるに至った。その産物は思考と行為を抑制する「精神的にきたえられた手錠」をはめられた人達によっておずおずと指導される一工業社会の光景（必ずしも全てが悪いとはいえないが）であった。どのようにして、これが生じたのか、これから物語ろう。